

2021年8月29日・佐土原キリスト教会・礼拝説教

聖書箇所：マルコ福音書1章2～8節 説教題：預言者の導く喜び

先日、インターネットの動画で、ご高齢の牧師先生が話をしておられるのを聞きました。その先生は「笑うことは健康に良い」という話をされた後、「自分は嬉しくて仕方がない」と言われました。何がそんなに嬉しいのか。それは「死んでも天国に行くに分かっているからだ」ということでした。「自分は死んでも天国に行ける。本当に嬉しい。それを思うと、生きているのも嬉しい」、そう言われました。私も、天国の約束を思う時に、本当に感謝です。それがなければ、人生は本当に虚しいと思います。いずれにしても、キリスト教信仰は、そのように人生の最後まで喜びを与えてくれる信仰だと思います。

さて、マルコは「福音書」を、バプテスマのヨハネの登場をもって語り始めます。ヨハネと聞くと、厳しい預言者のイメージがありますが、「福音書」ですから、その内容は、喜びの知らせです。では、ヨハネの記事は、私達にどんな喜びを語るのでしょうか。3つのことを申し上げます。

1. 神の御言葉を聞くことによる喜び

マルコが「イエス・キリストの物語、喜びの知らせ」を「バプテスマのヨハネの登場」から書き始めるのは、ヨハネが「イエスの露払い」として活動したからですが、彼の登場は唐突なものではなく、「旧約」に預言されていたことでした。「…荒野で叫ぶ者の声がする。『主の道を用意し、主の通られる道をまっすぐにせよ』…」(3)。この言葉通り、ヨハネは「荒野」に登場しました。どうして「荒野」だったのでしょうか。

イスラエルの人々が「荒野」と聞いて思い出すのは、「荒野の40年」である「出エジプト」の出来事でした。先祖が導かれた所、そしてそこで先祖は神と共に在り、神の声を聞いたのです。そのように「荒野」とは、「神の声を聞いた(聞く)場所」でした。神殿で働くはずの祭司の子であるヨハネが、神殿ではなく、荒野に立ったのは、そこで神の声を聞くため、聞いて人々に取り次ぐためだったと思います。ヨハネが信仰生活の喜びのために語ってくれること、それはまず、「神の言葉を聞く、聞き続ける」ことです。

ここに登場したヨハネは、3節の「旧約・イザヤ書」の言葉のように、荒野で神の声を聞きました、そして叫びました。しかし「イザヤ書」は、イエス様の時代の700年前に書かれた預言書です。この言葉は、最終的には700年後のヨハネのことを預言した言葉だったのですが、イザヤがこの言葉を語る時点においては、それが語られる状況がありました。

イザヤが召されてから100年後、やがてイスラエルがバビロンに捕囚として連れて行かれ、捕囚の民として暮らさなければならなくなる。その出来事を、既に生前に見ていたイザヤが、やがて捕囚の地で打ちのめされるだろう人々のために「神の励まし」を取り次いだ、それがこの言葉なのです。

人々が遙か西にあるイスラエルに帰りたいたいと思っても、そこには広大なアラビア半島の「荒野」が横たわっています。それでも初めの頃は「解放の希望」を持っていました。しかし次第に現実打ちのめされ、虚無的になり、信仰を捨てて行くのです。しかしイザヤは、そういう状態がやって来ることを遙か遠くに見て、「主の道を用意し、主の通られる道をまっすぐにせよ」(3)、それは「必ず神が介入して解放して下さる、必ず神がお前達を先導して、そこから脱出させて下さる時が来る。だから信仰を捨ててはならない。その時に備えて心の中の道を真っ直ぐにきなさい。『この道を通って私にお入り下さい』と言える道を心に備えておきなさい。決して絶望してはならない。諦めてはならない」、そう語ったのです。そして、現実「バビロン捕囚」が起こった時、失望しそうになる人々を

イザヤのこの言葉が励ましたのです。人々を虚無から救ったのです。そして預言者の言葉に支えられた彼らは、やがてバビロンに代わって支配者となったペルシャの王クロスの命令によって「彼らのために砂漠に造られた道」を通してイスラエルに帰って来るのです。

いずれにしても、イザヤを通して語られた神の言葉が、彼らを支えた、彼らを救ったのです。そしていよいよ、預言の本命であるヨハネが登場したのです。神の預言(約束)は必ず成就する、そのことも喜びの知らせだと思いますが、同時に、神の言葉に信仰生活の土台があり、救いがあり、希望がある。だからヨハネは、荒野で神の言葉を聞こうとしたのです。神の言葉に触れること、それは「ワッハッハ」という喜びではないでしょう。しかし、深いところから私達を支える希望、喜びなのです。

拉致被害者家族の横田早紀江さんという方がおられます。「死んでしまいたい」と思うほど、悲しみ、嘆いていた彼女を支えて来たのも、神の言葉です。「横暴な者に奪われた物も奪い返される。あなたの争う者とわたしは争い、あなたの子らをこのわたしが救う」(イザヤ 49:25)。めぐみさんが帰って来たわけではない。しかし、この言葉が彼女に希望を与え、彼女を確かに支えている、生かしていることを、お証しの文章で読みました。私達は、御言葉によって神と交わるのです。そして神の力を、希望を、喜びをもらうのです。逆に言うと、神の言葉を抜きしては、神と豊かに交わりを持って生きることは出来ないのです。その意味で、聖書を読むこと、それは信仰生活の深い喜びに関係して来るのではないのでしょうか。イザヤは言いました。「あなた方は主の書をつまびらかにたずねて、これを読め」(イザヤ 34:16 口語訳)。確かに、お互い、忙しい毎日です。しかし、聖書に触れる、その短い時間が、その日一日を変えるかもしれません。「御言葉に生かされる豊かな一日」を、喜びを、私達に与えるかも知れません。

いずれにしても、ヨハネは、御言葉に聞くことの大切さを教えます。

2. 悔い改めることによる喜び

信仰生活の喜びのポイント、2番目は「悔い改める」ことです。

4 節に「バプテスマのヨハネが荒野に現われて、罪の赦しのための悔い改めのバプテスマを宣べ伝えた」(4)とあります。ヨハネは人々に「悔い改め」を説きました。そして 5 節には「ユダヤ全国の人々とエルサレムの全住民が彼のところへ行き、自分の罪を告白して、ヨルダン川で彼からバプテスマを受けていた」(5)とあります。なぜ、ヨハネの許にこんなに大勢の人々がやって来たのでしょうか。

当時のユダヤ教では「異邦人がユダヤ教に改宗する時」に洗礼を施しました。ユダヤ人は神の民だから、洗礼を受ける必要がなかったのです。しかしヨハネは、ユダヤ人にも異邦人にも区別なく「悔い改め」を呼びかけ、洗礼を施しました。それが人々の心を惹いたのです。なぜ、全ての人に「罪の赦しのための悔い改めのバプテスマ」を説いたのでしょうか。それは「罪の赦し」は、ユダヤ人も異邦人も区別はない、全ての人に必要なことだからです。「私には神の赦しはいらない」、「私は神の前で悔い改める必要はない」と言える人は誰もいないのです。人々は、それをどこかで感じていたのではないのでしょうか。

「罪の悔い改め」というのは「悪いことをしたから悔い改める」ということだけではありません。そう考えると「私は何も悪いことなんかしていない」ということになります。そうではなく、聖書の言う「罪」とは「あるべき生き方が出来ない」ということです。なぜ、出来ないのか。神様と心を合わせるようにして生きていないからではないのでしょうか。なぜ、私達が人間関係の問題を抱えてしまうのか、なぜ妬みやプライドに縛られてしまうのか、なぜ神の恵みを純粹に喜んで生きられないのか。ヨハネは「それは、あなたが的を外した生き方をしているからだ…だから、まず『回れ右』をしなさい

い。そして神にしっかり帰りなさい。そこから信仰生活をやり直しなさい」と言ったのです。神を知らない人々に語ったのではない。神を知っている人々に語ったのです。

その意味で、神を見上げている私達に、ヨハネ(聖書)は言うのです。「あなたは神に喜ばれるように生きているか」。あるいは「あなたは喜びの信仰生活を生きているか」。もし「私はそうではないな」と思うなら、「もう一度、神に帰って、赦しを願い、赦しを受け取って歩き始めなさい」とヨハネは語ります。

ヨハネの言葉の背後には、「罪を知り、悔い改めるなら、罪は赦される」という彼の信仰があるのです。「新約」の信仰は、「赦しの恵み」です。しかし、罪を認め、悔い改める思いがなければ、「赦し」の必要を感じません。そうすると「神の赦し」が自分のものにならないのです。私事で恐縮ですが、私は、洗礼を受けた後も「自分は良い人間だ」と思っていました。しかしその時には、「神の赦し」も「神の慰め」も「神の恵み」も良く分かりませんでした。しかし仕事を通して自分の罪を示され、「自分は罪人だった」と分ったその時、「赦されたい」と思いました。その時、神様が教会を通して「神の赦し」を語って下さいました。「神の赦し」が身にしみました。イエス様の十字架が輝きました。教会に集えることが感謝であり、喜びになりました。恵みが分かるようになりました。

悔い改めは、一度きりのことではなく、「私は、神に喜んで頂けるような、あるべき生き方が出来ているか」と振り返り続けることは大切なことだと思います。「そうでない」と思う時、私達の心に「神の赦し」に対する渴望が生まれます。そして「そのあなたを、私は愛しているのだ、そのあなたと私は共に生きようとしているのだ」と神がその度に差し出して下さる「赦し」が、大きな慰めになるし、感謝になるし、救いになるのです。そして「赦されてある」という喜びがやって来るのです。先日の「デイリーブレッド」に「自分の罪と向き合う時、神様がそこを清めて下さり、神様は、清めを讚美に変えて下さいます」というような言葉がありました。罪の悔い改めが、喜びに変わるということでしょう。

「悔い改める」とは、下を向くことではありません、顔を上げることです。あの「放蕩息子」が父親の許に帰って行ったように、神様に向き直り、神様に帰り、神の恵みの中に飛び込み、赦しを受け取り、新しく歩み直すことです。感謝なこと。喜びに繋がることです。

3. 聖霊を求めることによる喜び

信仰生活の喜びのポイント、3番目は、「聖霊を求める」ことです。

ヨハネは人々に語りました。7節「私よりもさらに力のある方が、あとからおいでになります…私はあなたがたに水でバプテスマを授けましたが、その方は、あなたがたに聖霊のバプテスマをお授けになります」(7~8)。ヨハネが為したのは、人々に「悔い改め」を呼びかけ、その心を「悔い改め」に導くことでした。そして「悔い改め」のしるしとして、水の洗礼を施すことでした。しかし、人間に出来るのはここまでです。ヨハネはそれを知っていました。しかし「悔い改めれば、それでも神に喜ばれる信仰生活が出来るか」と言えば、そうではありません。使徒パウロでさえこう言っています。「私は…良いことをしたいと思ってもできず、悪いことをしないように努めても、どうしてもやめられません。自分ではしたくないことをしているとすれば…罪がなおも私をしっかりと捕らえているのです…ああ、私はなんとみじめで哀れな人間でしょう。いったいだれが、この悪い性質の奴隷状態から解放してくれるのでしょうか。しかし、主イエス・キリストのゆえに、ただ神に感謝します。キリストによって…いのちを与える御霊の力が、罪と死の悪循環から解放してくれたからです」(ローマ 7:18~8:2 リビングバイブル)。光に近づくほど影が濃くなるのと同じで、パウロも、神に近づくほど自分

の内実—いかに自分の中に神に(神の言葉に)逆らうものがあるか—が深みにおいて見えて来たのです。

私達は、人間的な力だけで祝福の信仰告白を生きることが出来ないのです。では、どうすれば良いのでしょうか。それは神の御霊に導いて頂くことです。イエスを信じる者には、自我にコントロールされるのではなく、御霊に支配して頂き、御霊にコントロールして頂く生き方があるのです。それは、求める者に「現実の力」として与えられるのです。私達も神の御霊に満たされて、神の御業を心に、体に受けながら、信仰生活を送ることが出来るのです。だからヨハネは「その方は、あなたがたに聖霊のバプテスマをお授けになります」(8)と言ったのです。

聖霊について「イザヤ書」にこんな記事があります。「…彼らを海から上らせた方は、どこにおられるのか。その輝かしい御腕をモーセの右に進ませ、彼らの前で水を分け…荒野の中を行く馬のように、つまづくことなく彼らに深みの底を歩ませた方はどこにおられるのか。家畜が谷を下るように、主の御霊が彼らをいこわせた」(イザヤ 63:11~14)。「出エジプト」の時、「神が御業をもって民を導き出されたこと」が回想されている言葉ですが、ポイントは、奴隷の苦しみの中にいた民が救い出されたり、紅海が2つに分けられたり、草木一本も生えないような荒野で食べ物を食べ、水を与えられて彼らが生きて来ることが出来たのは、「それは彼らの中に『神の御霊』がおいでになったからだ」とイザヤが言っていることです。神は、聖霊を通して御業をなさるのです。聖霊が、私達の魂の中で、私達の状況の中で働いて下さるのです。

では、聖霊の働きを求めるためにどうすれば良いのでしょうか。宗教改革者ルターは「聖霊は御言葉と共に働く」と言いました。御言葉に触れることも1つでしょう。しかしイエス様は言われました。「天の父が、求める人たちに、どうして聖霊を下さらないことがありましよう」(ルカ 11:13)。何よりも祈り求めることだと思います。祈り求める時、聖霊様は、私達に信仰生活の喜びを与えて、働いて下さるのではないのでしょうか。

4. 最後に

私達は、ここまで信仰生活を歩ませて頂きました。しかし、まだ私達の知らない信仰生活があるのだと思います。神はそれを用意して下さっています。御言葉を求めましょう。悔い改めに生きましょう。聖霊を求めましょう。そのようにして喜びの信仰生活を経験させて頂きましょう。